

淡路圓次郎の能力観と学校職業指導

——「優生学講座」との関連を中心として——

河 合 務

Awaji Enjiro's Thought about Human Ability and Vocational Guidance
in Schools

KAWAI Tsutomu

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第1巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol. 1/No.1

平成16年11月30日発行 November 30, 2004

淡路圓次郎の能力観と学校職業指導

——「優生学講座」との関連を中心として——

河合 務*

Awaji Enjiro's Thought about Human Ability and Vocational Guidance in Schools

KAWAI Tsutomu

I. はじめに

本稿は、「学校から仕事へのトランジション（移行）」を促し基礎づける学問として 1920 年代後半から日本の学校教育に導入されていった「職業指導」論の代表的論者であった淡路圓次郎（1895 - 1979）の能力観の分析を行う。筆者は、前稿¹において淡路圓次郎『職業心理学：適材選抜職業指導』（1930）における彼の「性能調査」の理論と方法について分析を行った。淡路の「性能調査」論は、「知能・運動能力・性格・教育程度・技能・興味の方向その他より、各個人の心身的診断を行うこと」と端的には表現されているが、その理論的背景にあった知能検査の功罪や能力観の問題性についてはさらに検討を要する重要な論点であると考えられる。本稿ではこの点について、淡路の能力観が優生学の影響を受け強く規定されていたのではないかという仮説に立ち、当時「優生学講座」（後述）のなかの一冊として出版された淡路の著作『個人差の心理学』（1932 年）²に即して考察を行うことにする。「優生学講座」は、日本民族衛生学会の創設者であった永井潜の『優生学概論』や古屋芳雄『優生学と人類遺伝学』など、東京の雄山閣出版社から出版されたものであり、当時の優生学に関する雑誌『民族衛生』などで広告されていたシリーズであった。また、学校職業指導における知能検査の使用が、一定の年齢段階における能力差をもとにした選別を正当化する役割を果たしたことの問題点についてはアメリカの歴史家チャップマンが『知能検査の開発と選別システムの功罪』³において論じたところであり、彼がアメリカの事例をもとに指摘したことと同様の問題が、日本の学校教育の歴史においてはどのように展開したのかについて具体的な素材をもとに検討していくことが重要であると考えられる。

この分野の先行研究として、永井潜および日本民族衛生学会（協会）の見解の分析や乙竹岩造の教育観・能力観の分析などを手がけている高木雅史の諸研究が存在する⁴。本稿はこうした先行研究の成果に学びながら、淡路圓次郎の能力観の分析に着手するものである。

* 地域教育学科

II. 「優生学講座」の基本性格

本章では、まず「優生学講座」の基本性格について概観する。この「講座」は主に1930年代に雄山閣出版から出版されていたシリーズであり、雑誌『民族衛生』（第1巻第6号、1932年〔昭和7年〕4月20日）の巻末広告には24冊の著者名および書名が掲げられている⁵。本稿では、この「講座」のうち特に重要だと考えられる著作である古屋芳雄『優生学原理と人類遺伝学』（1931年）、建部遯吾『優生学と社会生活』（1932年）、杉田直樹『優生学と犯罪及精神病』（1932年）、永井潜『優生学概論』（上、1936年）、そして淡路圓次郎『個人差の心理学』（1932年）の検討を中心に考察を行うことにする。

これらの著者のなかには、1930年（昭和5年）に設立され後に断種法制定運動などを展開した優生学関係の団体である日本民族衛生学会の直接の関係者が三人含まれている。永井潜は当学会の理事長であり、古屋芳雄は常務理事、杉田直樹は理事という立場にあった⁶。この学会は1935年（昭和10年）には協会として財団設立が認められ日本民族衛生協会と名称が変更になっており、同協会の機関誌が雑誌『民族衛生』であった。「優生学講座」は、この協会が重点目標のひとつとしていた「民族衛生学（優生学）思想の普及徹底」の一方策という性格が濃厚である。以下、「優生学講座」の基本的な性格について、より具体的に検討していくこととした。

1. 優生学と「優境学」

建部遯吾は主に社会学・社会思想の立場から『優生学と社会生活』を著しているが、同書の冒頭では次のように述べられている。

「厳肅に狭く採れば、優生学は先天的に優等なる人が生れ出づるには如何なる条件が必要であるかを研究するに止まる学科であるが、併し人生の費用から見ると、単純に先天的方面だけを取扱ふのでは、実際完全に優生、即ち人間改良の目的を完了することが甚だ難かしい。先天の外に之に加へて更に後天の条件をも吟味することが必要である。人間が生れ落ちてからの境遇教化、即ち自然的の運命とも謂ふべき境遇と人為的の差引と謂ふべき教化、此の両方面を包含する所の後天的事実、後天的条件、之を如何にせば優良なる人間が出来るかといふ趣旨で、学術的には少々假りの名称に近いが、所謂優境学的方面を加味することに依て、優生学の実用的目的が始めて完全に達せらるゝのである。」⁷

つまり、人間の先天的側面のみを見ては十分ではなく、後天的な境遇や教化といったものを加味しなければ真の優生学ではないと建部は論じているのである。この「優境学」は狭義の「優生学」（Eugenics, ユーゼニックス）に対して「ユーセニックス」（Euthenics）と呼ばれるものであり、「遺伝か環境か」（または「先天か後天か」という優生学の典型的な問題構成で考えるならば環境の方を重視する立場だと言える。この「優境学」に対しては、「環境の無力」を論じ遺伝決定論を強調する永井潜のような論者もみられるのだが⁸、建部遯吾は「後天的方面＝優境」をことのほか重視し、なかでも「家及び家庭」、「学校」、「世間」という三項目についてそれぞれ一章をあてて論じている⁹。しかし、「優生学講座」の著者群にあって建部ほどの「優境学」論者はむしろ稀であり、人間の先天的・遺伝的な条件による決定論こそが主流であった。戦前期の日本において1910年代から優生学が流行し始めた際、教育関係者は優生学を教育否定論だと受け止め、それへの危惧から能力の遺伝決定論批判を展開した。ただし、そうした教

育関係者の対応にあつては、人種改良という優生学の目的に対する積極的な批判が行われず「昭和ファシズム」期の能力観につながっていく優生学的能力観が克服されないまま残されたという問題点が指摘されている¹⁰。

建部が家庭や学校における教育を論じる際にも、そうした傾向がみられることを指摘しなければならない。建部は『優生学と社会生活』において、「優境学」を重視し多くのページを割いて論じてはいるものの、「先天方面＝優生」というテーマについても、やはり詳しく論じている。なかでも「人種・民族」の改良という論点が力説されている。

2. 「逆淘汰」論

民族衛生学会（協会）の常務理事であり医学博士であつた古屋芳雄は、「民族衛生学（優生遺伝学並びに生物測定学）ほど重要な研究部門は他に無いであらう。而しながらそれは従来のユトピア式の衛生学が象牙の塔を出て街頭に歩み出で、民族擁護の運動に携はる唯一の通路だからである。」¹¹と述べ、民族の改良という任務を担うべき学問としての民族衛生学（優生学）を強調する点で、建部と共通の思想的基盤に立っている。ただし、建部と異なるのは、古屋のほうが遺伝決定論により比重をかけた議論を展開している点である。

古屋はドイツ民族衛生学（Rassen Hygiene）の祖とされるアルフレッド・プレッツの議論を参照しつつ「逆淘汰」という現象について論じている。

「すべての生物に通ずる進化の原因としての淘汰作用は、劣悪なる素質者を抜き去り優秀なる素質者を之に加ふると云つたが、人類の文化の半面には、却て劣悪なるものを殖やし、優秀なる者を死滅せしむるが如き、所謂逆淘汰も起りつゝあるのである。これ我等の最も考慮を要する優生学上の大問題である。」¹²

すなわち「民族変質の原因としての逆淘汰」というわけである。この「逆淘汰」は、具体的には戦争の際に引き起こされると古屋は言う。古屋によれば、第一次世界大戦前後のドイツの経験を「逆淘汰」という観点からすると次のようになる。大戦によって直接に犠牲となったドイツ人は約 200 万人であるが、平和時の出生率から算定すると、戦死者が存命の場合に生まれたであろう 360 万人の子どもの生命が奪われたのだと古屋は述べる。また、戦争の際の経済封鎖、疾病、国家的保護の欠如といった間接的な犠牲者が約 270 万人。さらに、戦後に 18 歳から 30 歳の男女の比率が 77 人：100 人となり、結果として独身女性の比率が戦前より上昇した点を指摘し、戦前の比率のままであつたならば生まれたであろう子どもの数をも加算すると第一次世界大戦におけるドイツの犠牲者は 1000 万人なのだとし、「以上の如き生命の損失は、我等優生学者の側から見れば遺伝質の損失である」と古屋は論じている¹³。

この点に関して言えば、ドイツ民族衛生学の中心人物であつたプレッツがナチスに入党しながらも、ヒトラーに対し戦争回避と平和の維持を懇願していた事実を挙げながら、ファシズムが内包する帝国主義戦争という要素と優生学とは異質なものであるという点を指摘する市野川容孝の研究が参照されるべきであろうと思われる¹⁴。市野川は 1935 年に開催された国際人口学会議におけるプレッツの講演から次の部分を引用している。本稿においてもそれを引用しよう。

「近い将来、戦争が開始されれば、それがもたらす逆淘汰の影響は、きわめて恐ろしいものになるでしょう。なぜなら、戦争は、生まれつき優秀な者の出生率が低下するのをくい止め、低価値な素質の持ち主を民族内部から除去するために人種衛生学〔＝民族衛生学〕（〔 〕内

引用者注。以下同様。)が全精力を傾けておこなうことのすべてを、一瞬のうちに、何百倍、何千倍の規模で無に帰してしまうからであり、そのことによって、われわれの種は向上への道から突き落とされ、西洋文化は戦勝国においても、戦敗国においても、致命的な打撃を被ることになるからです。……人種衛生学を妨害する最も恐ろしい敵は、戦争に他なりません。人種衛生学は今日、必要不可欠なものであるがゆえに、われらドイツ人の総統ヒトラーも、国家社会主義はこれを全生活の中心に据えなければならないと宣言したのです。この人種衛生学は平和においてのみ、その実を結ぶことができるのであって、それ以外に道はありえません！ ……われわれ人種衛生学者は平和を創造し、これを維持するよう誠心誠意、努力しなければならぬのです。」¹⁵

「逆淘汰」を避けるために戦争を回避すべきであるというプレッツのこうした立場は、古屋芳雄と共通するものなのである。

ところで、古屋の「逆淘汰」論にあって、戦争と並んでもう一つ重要視されているのが「産児制限の風潮」である。古屋は述べている。

「戦争の齎らす生物学的災禍は大きい。しかしながらそれはなほ一時的現象である。然るにこの風潮は深く現代社会文明の半面に喰ひ入つて、慢性的に、じりじりと、絶へ間無く人類の優秀なる遺伝質を蝕んでゐるのである。」¹⁶

つまり、古屋は優生学者であり産児制限批判論者なのであるが、高木雅史が指摘するように現実には優生思想は産児制限と結びついて展開していくのであり¹⁷、古屋のような論者があまり受け入れられなかった原因や社会背景について具体的に検討していくことが必要になるであろう。今後の課題としたい。

3. 胎教論と「人口増進」論

「優生学講座」にあっては、「遺伝か環境か」(または「先天か後天か」)という論点の問題となると同時に、「純然たる先天と純然たる後天との間」(建部遯吾)に位置するものとして胎教論がクローズアップされるに至っている。たとえば、建部遯吾は次のように述べている。

「出生に就ては懐胎が其の第一着で、懐胎より出生に至るまで、先天と後天との分れ目の準備時代に対して、精神上でもあり、又身体上でもあり、身体と云ひ、精神と云ひ殆ど混沌たる原始状態から嬰兒として生れ落ちるまでの二百八十日間、東洋では古来胎教といふ事が大層重んぜられて居つた。別段遺伝学や優生学の実質的知識に富んで居つた訳ではないが、民族の長い経験と、殊に家を重んじ、人倫を重んずる思想の発達が、其の余波として斯様に胎教を重んずるの精神となつて来たのである。」¹⁸

つまり、建部は「先天と後天との分れ目の準備時代」と胎教を位置づけ¹⁹、古来からの東洋における胎教の伝統に言及するのである。そして、朱子の『小学』にみられる「婦人児を孕めば目に邪色を視ず、耳に淫聲を聴かず」²⁰という文句を参照しつつ、「母体の衛生的注意、精神的修養に細かなる条目を励行する事は勿論、其身を置く所の周囲の状況、所謂環界をも亦シツカリと、朗かに清浄に、健全なるものにせねばならぬとふのが、此の胎教の大切なる原理である」²¹と述べている。

また、建部は「西洋でも近頃になつて胎教の論が次第に盛んになりつゝある」として、「『生前教育』とでも直訳すべきプレナタル・エデュケーション」²²にも言及する。彼はこの「プレ

ナタル・エデュケーション」あるいは胎教研究が、遺伝学や優生学が世の中の実際家の注意を惹くに至った以上、必ず出て来なければならない事柄であるとしている²³。

さらに建部は、母親の妊娠期、つまり胎教期を取りまく状況にあつて「母性保護」問題が最重要課題となるとし、妊婦の「婦人労働問題」が各国で問題になってきているとする²⁴。

建部にあつては、こうした「母性保護」問題は「人口増進」という命題を媒介とすることで「出産奨励」という社会政策、さらには「生まれたる嬰兒が幼児となり、少年となるの後までにも及ばねばならない」という議論に接続し、これは「児童保護」という社会政策と結びつくだとされている²⁵。

ただし、建部の「人口増進」論には、「悪疾を子孫に遺伝するの虞あるを以て婚姻を禁じ、又は去勢、即ち男女両性の産児能力の消滅を実施すべしとする事」という産児制限論とセットになっている²⁶。建部のこうした議論は、日本民族衛生学会（協会）が断種法定定に向けた運動を展開したことと軌を一にしている。建部は「先天か後天か」という論点のうち後天性を重視する傾向が比較的みられ、後天的要因への働きかけによる「人種・民族」の改良という論点が最大の課題として認識されている。

4. 民族衛生学

日本民族衛生学会（協会）の創始者であり理事長であり医学博士であつた永井潜は『優生学概論』（上、1936年）において「優生学（民族衛生学）の定義」という章を立て、次のように述べている。

「優生学とは Eugenics の邦訳である。Eugenics とは、希臘語の「良き産れ」の意味を語源として居るもので、英語で云へば Well born である。独逸では斯の意味の学問を自国語に改めて民族（人種）衛生学 Rassen Hygiene と呼ぶことがブレッツによつて提唱された。夫れ以来英語でも Race Hygiene と云ふ名が唱へられるに至つた。」²⁷

つまり、優生学とは「良き生まれ」をもともと意味するのであるが、永井はブレッツに倣いながら、直截に民族（人種）衛生学を意味するものと捉えられている。永井にあつて優生学が「国体」・「日本精神」といった言葉と矛盾することなく接続していったのである。

また、永井は次のようにも述べている。

「由来生物のあらゆる性状は、内在せる先天的・遺伝的素質に、外来の後天的・環境的影響が働きかけて、喚び起こされるものであるが、而かも其の遺伝的素質なるものは恒久性を有するもので、たとひ環境の影響によつて始めて一定の展開をなすとは云へ、外来の働によつて其の本性を変化することは殆ど不可能であり、随つて個体が後天的に外界の影響によつて得た所の獲得性は、遺伝しないのであるから、内的素質の改善を企図するに際して、環境の働を借りることは、無意義であつて、どうしても良き素質を有てるものを保護して、其の繁殖を助成し、悪しき素質を有てるものを切除する外に、仕方はないのである。換言すれば、素質の改善は、素質の淘汰に待つ外仕方はないのである。茲に動すべからざる優生学の礎石が据えられるのである。」²⁸

つまり、永井は個体が後天的に獲得したものは遺伝しないという立場をとっている。因みにこれは獲得形質の遺伝を認めるラマルキズムの影響が根強いフランスの優生主義思潮とは状況を異にしていることを示すものである²⁹。

永井は後天的・環境的影響をほとんど重要視しておらず、「悪しき素質を有てるものを切除する」という「素質の淘汰」論さえ展開している³⁰。永井のこうした考え方が日本民族衛生学会（協会）の断種法制定運動の原動力となっていると考えられる。

こうした永井の思想傾向は、同学会（協会）の理事のひとりであり医学博士でもあった杉田直樹の『優生学と犯罪及精神病』（1932年）にも共有されている。

「民族衛生の努むべき事業は多数にあるが、その中にも精神病者、精神変質者、犯罪者の発生防止の問題は、特に社会関係の喫緊なるものであつて、先づ第一に留意せられなければならない方面である。」³¹

つまり、精神病者や精神変質者、犯罪者の発生防止も民族衛生の問題として論じられるべきだと杉田は述べるのである。そのうえで、杉田は次のように述べている。

「今私は本書に於いて、此の優生学的啓蒙運動の一助とする目的から、精神病及び犯罪と遺伝との関係を主題として、現在の医学的知識の大体を紹介し、これに関連して夫等の者の発生防止に対する根本的医学的方法として最近盛に論議せられるに至つた断種法の生ひ立ちと目下の実施後の成績大要とを付記し、以て一般諸賢に此の方面の知識を得て戴きたいと志した次第である。」³²

このように、杉田は永井と同様に断種法制定への意欲を表明しているのである。

日本民族衛生学会（協会）は1933年（昭和8年）に断種法草案を起草し、内務省衛生局長らと話し合ったが実現には至らなかった。また、翌年の第65帝国議会に「民族優生学保護法案」が審議未了となるなど、紆余曲折を経ながら1940年（昭和15年）の国民優生法における断種条項の制定へと結実していくことになる。これは、「遺伝性精神病」などを有する者に「生殖不能ナラシムル手術又ハ処置」を受けさせるというものであり、「悪質ナル遺伝性疾患ヲ有スル者ノ増加ヲ防遏スルト共ニ健全ナル素質ヲ有スル者ノ増加ヲ図リ以テ国民素質ノ向上ヲ期スルコトヲ目的トス」というものであった³³。

Ⅲ. 「優生学講座」と淡路圓次郎

心理学者・淡路圓次郎は、『個人差の心理学』（1932年）の序文において「本講座の性質上、この小著とても意義に乏しからざるを信ずるが故に、敢へて清鑒に供することゝする」と述べており³⁴、同書を「優生学講座」のうちの一冊として刊行することに賛同し自覚的であったことを表明している。そのうえで淡路は、同書の中心的な論題を「個人や民族の素質の向上」という点に定位し議論を展開している。淡路は述べている。

「吾々は一方に於いて、個性の先天的規定を認め、或は遺伝的事実に立脚して、個人や民族の処遇を定め、或は遺伝関係を合理的に統制して、個人や民族の向上を企図すると同時に、他方に於て、個性に働く諸多の後天的規定をも見逃さず、可能性の限りに於て、或は物的社会的環境を改善して素質の十分なる伸展を図り、或は完全なる訓育陶冶を施して性能の円満なる充実を試み、澁刺たる健康と優秀なる知力と健全なる思想と鞏固なる意志とを保有せしめて、個人的存在を全うせしめると共に社会に貢献奉仕せしめなくてはならぬ。即ち各人のもつ先天的並びに後天的事情の中に、好ましからざるものがあれば刈除し、望ましきものを補充して、個人としても社会人としても理想的な個性を作上げることに力を致すべきである。」³⁵

このように淡路は、個性の先天的・遺伝的規定と後天的・環境的規定の両方に注意を払う論者であり、「優生学講座」の論者たちのなかでは、優生学とともに優境学をも重視する建部遜吾と近い立場を有していると言えよう。淡路は述べている。

「優生運動と優境運動とは、実に車の両輪の如きものであつて、偕に手を携へ調和を保ち得て民族の心身の衛生を全うすることが出来る。その一方のみに偏することは、その双方を認めぬと等しく、決して嘉すべきことではない。」³⁶

つまり、淡路は優生学と優境学の調和を重視する論者なのである。また、「民族の心身の衛生を全うする」ことを淡路は主張している³⁷。この点で淡路と日本民族衛生学会（協会）との思想的共通性を指摘することができる。

そのうえで、「優生学講座」の執筆者グループにおける淡路圓次郎の独特な点に目を向けるとすれば、それはやはり淡路が個人差・能力差の本質と原因を探究し学校職業指導の改革を行おうとしていた心理学者であった点に求められるように思われる。淡路は当時の職業指導運動家たちの間で「個性」³⁸と同義で用いられていた「性能」という言葉の内実について考察しながら「性能の民族的規定」という章を立て、次のように述べている。

「元来、吾々には民族的偏見があり、誰しも自分の所属する民族を身最負して選良民族と見做し、他民族はすべて劣等なるものとして軽蔑する傾があり、しかもこの傾向が可成り根強いもので容易に改め難いために、正当な比較判定は頗る困難の状態に在る。孰れの民族も自己の武力や宗教や文化がいつかは他民族のそれらを圧倒して、遂に全世界に覇たるべきことを信じて疑はない。更に近時益々熾烈を加へてゐる民族的競争心と民族的怨恨とは、この偏見を助長して、一倍公平なる民族性の考察を不可能ならしめてゐる。」³⁹

つまり、自民族を「選良民族」とみなす民族的偏見を排除することを淡路は主張しているのである。そして、淡路は自らの依拠する研究方法を「民族性の実験的研究」と述べ、次のように論じている。

「ところが、近頃になつて種々の性能検査法が制定せられ、知能や特殊能力は云ふまでもなく、気質や性格の如きすらも、客観的に測定することが出来るやうになり、しかもそれが各国に於て翻案の上標準化せられて共通のものとなり、経験あるものが一定の手續を踏んで施行する限り、結果に狂ひを生じないこととなつた。」⁴⁰

ここで淡路が述べる「性能検査法」とは 20 世紀初頭にフランスのアルフレッド・ビネーによって開発された知能検査や、その影響を受けてアメリカのルイス・ターマンが改良したスタンフォード・ビネー知能検査、さらには日本の鈴木治太郎らの心理学者が改良を進めた各種のメンタル・テストのことを指している⁴¹。淡路自身もメンタル・テストの開発に携わった経緯がある⁴²。淡路は、そうしたメンタル・テストによって知能や能力の客観的な把握を目指したのである。

淡路は「民族性の実験的研究」が盛んになってきた第一次大戦後のアメリカの状況にも言及している。アメリカでは、まず、移民に対する心理学的検査を基盤として民族性能の比較研究が行われるようになったという。これには、すでに大戦中に軍隊で行われていた知能検査が応用されたと淡路は述べている⁴³。

淡路の『個人差の心理学』では、アメリカにおける民族の比較研究の成果が「諸民族の性能的特色」という章において大きく紹介されている。そこではアメリカに移住した日本人移民に

対する知能検査に対する言及もみられ、「日本人は常に白人を凌駕した成績を示してゐるのであるから、我國民は知力的には列強と伍して何等の引け目をも感じる所はない」との言辭がみられる⁴⁴。淡路にあっては、ある種客觀的な測定方法としての知能検査の基盤とする研究成果が「列強に伍する」という國家觀・國家意識に連接されているのである。

IV. 淡路圓次郎の能力觀・發達觀

淡路圓次郎は『職業心理学：適材選抜職業指導』（1930年）において、企業の人事担当者の気紛れや、教師の印象本位の主觀的評価を排して、科学的で合理的かつ客觀的基準に基づく「職業指導」の方法を提示した⁴⁵。その際、学業達成に関する種々の試験とともに、学業達成の基礎となる知的能力を測定する方法として知能検査の活用を提唱している。淡路は鈴木治太郎とともに、欧米で盛んに行われていた知能検査を日本の教育現場に積極的に導入しようとした当時の心理学者の一派を形成していたわけであるが、そうした知能検査の歴史的展開の源流を辿るならば、イギリスのF.ゴールトンという優生学の始祖と目される人物に行き当たる。じつさい、淡路は『個人差の心理学』（1932年）において「知能の遺傳」という一節を設け、「一般知能の遺傳に関しては、ゴールトン以来研究の数が夥しい」と述べ⁴⁶、ゴールトン以来の知能検査の研究成果に言及しつつ、『個人差の心理学』では『職業心理学』よりも、さらに突っ込んだ教育論、とりわけて「教育可能性」論を展開する。それは知能や運動能力、さらに性格をも含む「性能」の世代的遺傳に関わる議論である。彼は述べている。

「若し性能が先天的規定の下に固定不変のものであるならば、すべての教育や訓練は全く徒勞であつて、結局人生は『為すやうに成らないで、成るやうになる』ことになり、成るが儘に抛擲して置くのが最も賢明な方策であるといふ決定論的自棄に陥らざるを得なくなる。然し乍ら、性能の可塑性を否定することは到底幾多の教育事実の許す所ではなく、能力も性格も実際に於て陶冶せられ、鍛錬によつて伸び薫陶によつて改まることは否定ができない。」⁴⁷つまり、淡路は「性能の可塑性を否定することは到底幾多の教育事実の許す所ではな」いことを論じ、一面的な「性能」の先天的決定論を排し、性能の可塑性と教育の効果を認めるといふ意味での「教育可能性」論者なのである。

ただし、淡路のそうした議論には一定の限定が付けられている。彼は次のようにも述べている。

「教育は確に効果があり、性能は確に変化するが、その効果並びに変化には常にある度の限界がある。教育は鍊金術ではないから、石を化して羊たらしめるやうな魔術の杖はもたない。教育が良ければ、低能者をして境界線級を突破して常人に伍することを得しめたり、常人の知能を伸展させて佳良級に入らしめたりすることが出来、また逆に教育の仕方が悪ければ、常人をして低能者に仲間入りさせたり、優秀者をあまり香しからぬ状態に陥らしめたりすることがあり、知能指数で云へば、10内外の進退を図ることは、必ずしも不可能ではなく、知能段階で云へば、一段階位の上下を生じさせることは出来ないものでもない。（中略）

しかし、この性能の可塑性には限度があり、欲する方向にどこまでも任意に変化せしめられるものではない。教育はこの性能可塑性の限度内に於て有効なのであつて、之を超えてまでも効力を發揮することは出来ない。」

つまり、淡路は知能指数を指標とし、教育の効果は「性能可塑性の限度」であるところの知能

指数 10 前後を変化させることができる程度である、というわけである。そして、淡路はゴールトン以来の知能の世代的遺伝論を基本的に踏襲しているのであり、教育や環境という後天的要因を遺伝という先天的な要因のいわば「従属要因」だとする立場をとっていたのである。また、この点で、淡路の能力観・発達観は永井潜のそれと同様の特徴を有している。「優生学講座」の一書として著された淡路の『個人差の心理学』は、日本民族優生学会（協会）の中心人物であった永井潜の『優生学概論』と能力観・発達観の面での共通点を有していたのである。

V. 結びにかえて——優生学的能力観と学校職業指導——

今回取り上げた「優生学講座」執筆者たちは、建部遜吾が社会学者、永井潜と杉田直樹そして古屋芳雄が医者、そして淡路圓次郎は心理学者であった。彼らはそれぞれの専門的な見地から優生学（民族衛生学）を論じており、共通点と相違点をそれぞれに有していた。このなかにあつて、淡路圓次郎は学校教育に対して踏み込んだ議論を展開していること、とりわけて学校職業指導のあり方について具体的な提言を行っていることを彼の特徴点として指摘することができる。その場合の学校職業指導論とは、知能検査等のメンタル・テストによる「性能調査」に基づいて生徒一人ひとりの能力の個人差をよく把握したうえで教育内容・方法と進路選択のアドバイスを行うべきであるという意識（画一教育への批判意識）に支えられていた。

また、職業指導運動史における淡路圓次郎という点に目を転じてみると、「優生学講座」のなかの一冊として自らの著書『個人差の心理学』を出版している点が淡路の特徴点として浮かび上がってくるように思われる。淡路の能力観は、完全なる遺伝決定論とまではいかないものの、やはり優生学（及び優境学）をバックグラウンドにした能力観を有しており、それが彼の学校職業指導論にも影響を及ぼしていた。淡路にあつては、能力の個人的な差異を学校教育においていかに平等化するかという視点は極めて弱く、能力差の世代的再生産が黙認され、さらには「列強に伍する」という国民の育成という国策的テーマと合致し覆われている。こうした人種・民族の「改良」を最優先に考える思考枠組みこそが問題化されねばならない。

ところで、広田照幸は戦前期の職業指導論について次のように述べている。

「測定によって得られる、個人差を示す諸特性の束であり、『性能』ないしは『職業適性』と呼び替える『個性』は、さまざまな社会・文化的要因が個々人の特性に及ぼす影響を結果的に無視し、階層差や地域差を個人的な性質の差に還元してしまうキイ・ワードになったとすることができよう。階層差や地域差によって影響を受けていた個人間の差異は、「個性」という語によってそのまま個人の本来の差異として固定されることになったわけである。」⁴⁸ 広田がここで言う「個性」とは、淡路の用語法で言えば「個人差」である。淡路が測定によって得られるとする「個人差」という言葉は、結果として個人の本来の差異として固定されることになったと考えることができる。そして、社会・文化的要因が個々人の特性に及ぼす影響が淡路にあつては無視されることになっていたと考えられる。こうした階層差や地域差の固定化、さらには拡大化という傾向こそが近年の日本の教育政策にみられる特徴でもある。このような政策動向の根底には、優生学に通じるものがあると齋藤貴男は指摘している⁴⁹。そうした現代の問題を克服していくため、これまでの歴史的経緯を踏まえ考察を深めていくことが重要であると考えられる。

注

- 1 拙稿「淡路圓次郎における『性能調査』と『職業指導』——『職業心理学』の構想に即して——」『作新学院大学紀要——文化と科学——』第12号, 2002年, 143頁~155頁。
- 2 淡路圓次郎『個人差の心理学』(雄山閣, 1932年)
- 3 P.D.チャップマン『知能検査の開発と選別システムの功罪』(菅田・玉村監訳, 晃洋書房, 1995年, 原書は1988年)
- 4 高木雅史「1900年代~1920年代の日本における『低能児・優秀児』教育の思想——乙竹岩造の教育観・能力観の分析を通して——」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第37巻, 1990年度, 115頁~125頁。「1920~30年代における優生学的能力観——永井潜および日本民族衛生学会(協会)の見解を中心に——」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第38巻, 1991年度, 161頁~170頁, など。
- 5 高木「1920~30年代における優生学的能力観」169頁~170頁。
- 6 高木, 同上論文, 165頁。
- 7 建部遯吾『優生学と社会生活』(雄山閣, 1932年), 4頁。
- 8 永井潜『優生学概論』(上, 雄山閣, 1936年), 216頁~264頁。
- 9 建部, 前掲書, 167頁~189頁, 190頁~211頁, 212頁~237頁。
- 10 高木雅史「『大正デモクラシー』と優生学——『自由教育』論者の能力観の一側面——」(森田他編『教育学年報1』303頁~330頁) 322頁~323頁。
- 11 古屋芳雄『優生学原理と人類遺伝学』(雄山閣, 1931年) 1頁。
- 12 古屋, 同上書, 268頁~269頁。
- 13 古屋, 同上書, 269頁~271頁。
- 14 市野川容孝「近代医学と死の医療化(完)」『思想』(1999年9月号) 88頁~117頁。
- 15 市野川, 同上論文, 106頁~107頁より再引用。
- 16 古屋, 前掲書, 272頁。
- 17 高木「戦前日本における優生思想の展開と能力観・教育観——産児制限および人口政策との関係を中心に——」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第40巻第1号, 1993年度, 41頁~51頁。
- 18 建部, 前掲書, 94頁。
- 19 同上。
- 20 同上書, 95頁。
- 21 同上。
- 22 同上。
- 23 同上。
- 24 同上書, 96頁。
- 25 同上書 100頁~101頁。
- 26 同上書, 105頁。
- 27 永井潜『優生学概論』(上) 22頁。
- 28 同上書, 22頁~23頁。
- 29 米本他著『優生学と人間社会』(講談社, 2000年) 164頁(髭島次郎執筆箇所), 参照。
- 30 永井潜『優生学概論』(上) 23頁。
- 31 杉田直樹『優生学と犯罪及精神病』(雄山閣, 1932年) 2頁。
- 32 同上書, 3頁。
- 33 高木「1920~30年代における優生学的能力観」165頁~166頁, 参照。
- 34 淡路圓次郎『個人差の心理学』(雄山閣, 1932年)「自序」。

-
- ³⁵同上書, 13 頁。
- ³⁶同上。
- ³⁷同上。
- ³⁸広田照幸『教育言説の歴史社会学』（名古屋大学出版会, 2001 年）94 頁～126 頁, 参照。
- ³⁹淡路『個人差の心理学』234 頁～235 頁。
- ⁴⁰同上書, 238 頁～239 頁。
- ⁴¹前掲拙稿, 148 頁～150 頁, 参照。
- ⁴²淡路圓次郎『小学校に於ける職業指導法』（大阪市少年職業指導研究会, 1931 年）, 『成人智能検査手引』（山越工作所, 1934 年）。
- ⁴³淡路『個人差の心理学』239 頁～240 頁。
- ⁴⁴同上書, 301 頁。こうした淡路の論展開の仕方は, 明治期の国家主義者である加藤弘之（1836-1916）やそれを引き継いだ生物進化論者の浅丘次郎（1868-1944）らの思想的営為に通じるものがある。鶴浦祐「近代日本における社会ダーウィニズムの受容と展開」（『講座・進化②進化思想と社会』東京大学出版会, 1991 年, 119-152 頁。）参照。
- ⁴⁵前掲拙稿, 144 頁～146 頁。
- ⁴⁶淡路『個人差の心理学』21 頁。
- ⁴⁷同上書, 76 頁～77 頁。
- ⁴⁸広田, 前掲書, 118 頁～119 頁。
- ⁴⁹斎藤貴男『機会不平等』（文芸春秋, 2000 年）16-20 頁, 294-350 頁。また, 現代日本における知能検査の問題性については小笠毅『就学時健診を考える』（岩波書店, 1998 年）を参照。